

三年前に社会福祉士になるための実習で来た福祉施設を改めて訪ねた。当時は生活保護を受けた人のための「無料低額宿泊所」だったが、現在は「日常生活支援住居施設」として再出発していた。施設の種別も場所も変わっていたが、ひとつ屋根の下では変わらない日常があった。



ひとつ屋根の下で

「またお水飲むんですか」。施設スタッフが、男性の顔を心配そうにのぞき込む。男性は「うん：」と答えるものの、二人の視線は合わない。男性は精神疾患があり、水を止めどもなく大量に飲んでしまっつ。

三年前も同じ光景だった。当時のスタッフとの会話を思い出した。「不安なのかも。彼にとつては水が喉を通ることと安心するんだと思う。飲んだ後、ほつとした表情だから」。毎日見

守っているからこそ分かるまなざしに福祉の矜持（きんじ）を感じ、印象に残っていた。

施設のありようは変わっていた。日常生活支援住居施設になり、場所も移転して新築に。見違えるようにきれいになっていった。

日常生活支援住居施設は手厚い職員配置基準を満たした施設で、認定は厳格。入居者一人一人の支援計画が必要となるなど国が思い描いた「優良さ」が求められる。ただ、本当に大切なことは、ここで暮らす人が「良い」と思えること。「快適だよ」

「生きていて良かったって思えた」。入居者の評判は上々。ほつとする一方、こんな場面にも



それぞれのペースで日常を送る入居者たち

出くわした。

認知症が進む入居者が、帰りが分からず迷子になり、警察職員に付き添われて帰ってきていた。「困るんです、今月で三回目ですよ」とあからさまに不機嫌な警察に、施設スタッフが何度も頭を下げていた。

慣れ親しんだ土地を離れるのは、想像以上にストレスがかかる。認知症の症状に影響を与えたと否定できなくもない。周囲の理解を得られているのか。どれもこれも織り込み済みで、スタッフは今日も奔走する。

国は「住み慣れた地域で安心して：」「生きづらさを抱えた人が安心して：」などの決まり文句で福祉を進める。だが安心の担保はそれぞれ違っつ。一杯の喉越しに安心感を得る人もいる。机上で測れないところにこそ、福祉の神髄はやはり宿るのだらうと思っつ。

帰り際、何人かの入居者が手を振ってくれた。ニコニコした表情が温かく、私にも安心感が広がった。(木原育子、随時掲載)